

地区指導者育成セミナー講演

「無言館」のこと 一戦没画学生が伝えるものー

[講師]

作家 窪島 誠一郎



[略歴]

1941年(昭和16)年東京生まれ。信濃デッサン館・無言館館主、作家。印刷工、酒場経営などを経て、64(同39)年、東京都世田谷区に小劇場運動の草分けとなる「キッド・アイラック・アート・ホール」を設立。

1979(昭和54)年、長野県上田市に夭折画家のデッサンを展示する「信濃デッサン館」を、1997(平成9)年、同館隣接地に戦没画学生慰霊美術館「無言館」を設立。

『父への手紙』『明大前』物語(筑摩書房)、『信濃デッサン館日記』『無言館の坂道』『雁と雁の子』(平凡社)、『無言館

ノート』『石榴(ざくろ)と銃』『鬼火の里』(集英社)、『無言館への旅』『高間筆子幻景』(白水社)、近刊に初めての絵本『約束』『いのち』(アリス館)、『父水上勉』『自傳』をあるく』(白水社)など著書多数。

第46回産経児童出版文化賞、第14回地方出版文化功労賞、第7回信毎賞、第13回NHK地域放送文化賞を受賞。2005(平成17)年、「無言館」の活動で第53回菊池寛賞受賞。2016(平成28)年、平和活動にあえられる第1回澄和フューチャリスト賞を受賞。

マイクが3本もあるのは、初めてです。ご紹介いただいた窪島誠一郎と申します。昨日うとうとしながら考えたら、今から9年前やはりこちらの西ロータリーの、こうして高いところからお話しさせていただいた思い出がよみがえりました。再び湯川ガバナーのご推挽もあってこうしてここに立たせていただくことを、とても幸せに思っています。ただ、果

たして皆さんのセミナーの何か役に立つ話ができるかどうか、ちょっと自信がないんですけれども、一生懸命お話しさせていただきます。靴の底に田舎の泥が付いているような男ですので、昨日このホテルに来たときにはたまげて、ベッドが2つもあって、びよんびよん跳ねて、いつも足の指でテレビが消せるようなビジネスホテルに泊まっていますので、興奮して

寝付かれませんでした。今、自分を奮い立たせる思いでここに立っております。

とはいえ私は物書きの半人前というか、3分の1人前ぐらいの物書きですので、窪島誠一郎という名前を聞いても、皆さんの中でうなずかれる方はほとんどいらっしゃらないんじゃないかと思います。また、今日テーマにさせていただいている、この「無言館のこと」という、この「無言館」、言葉のない館と書くこの美術館のことも、おそらくご存じのない方が9割、10割近くだろうと思います。お話は当然、私の自己紹介を兼ねて、やはりこの無言館という美術館がどういう美術館であるか、どうしてそんな美術館が私のような男の手によって開館したか、そのことだけをお話することで時間満了になるんじゃないかと思っております。

「無言館」という私の営みます美術館は、長野県の上田というところにございます。信州上田ですね。信州っていうのは広いので、南も東も北も大変長く伸びておりますが、私の美術館は東信、信州の中でも東ですね。東京駅から上野、大宮、高崎、軽井沢、その次の次辺りに上田という山ひだにこびり付くような、人口が15万ほどですけれども、地方都市がございます。その上田という町のいわば町外れで、海拔が700メートルぐらいあるんですけれども、山あいの本当に木漏れ日の中にぽつんとできている私設美術館。いわゆる公的な援助であるとか税金の優遇であるとか、そういったものは一切受けていない、いわば生粋の自給自足美術館と言ってもいいかと思いますが、それが無言館です。

先の太平洋戦争、あるいはさかのぼって日中戦争、私たち日本人が記憶の底をどんなに削っても洗い落とせない、戦争という歴史がございました。先の太平洋戦争、いつの間にか72年という暦を経ましたけれど、太平洋戦争では三百数十万人という日本人の兵隊さんが亡くなっていきました。近隣アジア諸国の犠牲者は2,000万人、あるいは3,000万人ともいわれています。その三百数十万人という亡くなった兵隊さんの中には、ほんの一握りでしたけれども、

生きて帰ったら絵描きになりたい、もっともっと勉強して一人前の絵描きになりたい、絵を勉強していた画学生さんたちも含まれておりました。無言館に並んでいる絵描きの卵、まだ絵描きまで行ってませんね、画学生さん。現在、無言館には、そんな画学生さん130名、177点の作品が展示されています。

今では振り返ると不思議なことですがけれども、戦時中は絵を描くということじたいが白眼視されておりました。簡単に言うと非国民とよばれていました。絵を描く学生だけじゃありません。音楽、ピアノを弾いたり歌を作ったり、あるいは演劇に打ち込んだりお芝居に打ち込んだり、あるいは文学に打ち込んだり詩を書いたり、多くの芸術を志した若者たちがいたわけですがけれども、等しく非国民、中には国賊と呼ぶ人たちもいました。「この非常時に外国で多くの兵隊さんが戦っているさなか、のんきに美術学校に行って裸の女の絵を描いている。あそこの次男坊はとんでもない非国民だ」。あの頃は絵を描くという自由が許されなかった時代でした。私の美術館に並んでいる画学生さんも、等しくそんな時代をくぐり抜け、必死になって絵筆を動かし、召集令状を受け取ったあとも、ぎりぎりの執行猶予の時間を、絵を描くことだけに捧げ尽くして亡くなっていった若者たちでした。

「無言館」という名前、言葉のない館という不思議な名前の意味は多々ございます。これから皆さんに私の美術館のドアを開けて、まだいらっしゃることのない方は目を閉じて、信州の山あいにそんな美術館があるんだと空想してください。そしてぜひともその「無言館」という名前がなぜ付けられたか、どうして「無言館」なのか、そんなことも皆さんの頭の中でちょっと巡らせていただければと思っています。

鹿兒島県の種子島。遠いですね。よく種子島宇宙センターというのが、ロケットが打ち上げられるたびに報道されますけれども、南種子町、種子島でも一番南端の町です。そこで生まれ育った日高安典。27歳でフィリピンのルソン島で戦死しました。彼

が一番最後まで描いていたのは、モデルを務めてくれた恋人の絵でした。現在私の美術館の木の扉を開けますと、一番手前の右側の壁です。黒髪を後ろに大きく束ねて、豊かな乳房をちょっと上に反らしたように拳を固めてじっと前を向いている、とっても美しい女性の裸身像です。難しく言うと、あれは黄土色、イエローオーカーっていうんでしょうかね、土色と黄色が入り交じったような不思議な色彩の中に、その女性の肌がくっきりと浮かび上がっている美しい絵です。

日高安典は召集令状（あの当時は赤紙と呼ばれました）、赤紙を受け取ったあとの約半月間、自分のアトリエ、仕事場にこもって彼女のデッサンを壁に張り、キャンパスに油絵の具を付けていた。外では出征兵士を送る「天皇陛下万歳」の声がこだまし、日の丸の小旗が打ち振られる。しかしなかなか彼は自分の部屋から出てこない。しびれを切らした弟さん、つい先年90お幾つかでお亡くなりになりましたが、稔典さん、弟さんがいらっしゃいました。弟さんが安典のドアをたたきます。「みんながお待ちかねだぞ。兄さん、何やってんだ」。そうしたら日高安典は、モデルを務めてくれた恋人の絵に絵の具をぬり、デッサンしながら「あと5分、あと10分この絵を描かせておいてほしい」。「そのときの唇をかんだ兄、安典の顔を今も忘れてません」と稔典さんはおっしゃっていました。モデルを務めてくれた恋人には「生きて帰ったら必ずこの絵の続きを描くから」、そう言って戦地にたつんですけれども、日高安典は帰ってこられなかった。

今その無言館の右壁に飾られた、一番手前の日高安典の裸婦像のキャンパスの裏側に、これは普段皆さんにお見せすることはできませんけれども、たった2行、最後に記した日高安典の言葉が記されています。「小生は必ず生きて帰ります。この絵を描くために」。いい言葉ですよ。最近、言葉の木炭がだんだん剥がれ落ちてたんですけれども、修復をしまして、何とか今は明瞭にその文字が見えるように保存しております。ぜひ美術館にいらっしゃったら、

この日高安典の絵の前に立っていただければと思います。

その日高安典さんの描いた恋人像の真向かい、左手です、静岡県の浜松から出た画学生、中村萬平の絵が並んでいます。中村萬平はもう戦争が終わるということが直前だということを知りながら、昭和18年、満州の武川というところで26歳の生涯を閉じました。彼が描いていたのもやはり、学生結婚していた霜子（しもこ）さん。とってもすてきな名前です。彼女の絵を描いて戦地にたちました。当時、霜子さんは赤ちゃんを身ごもっていました。生まれてくる我が子の顔も知らず、また、産後の肥立ちが悪く、霜子さんも出産後わずか半月で他界します。愛しい妻をみとることなく、生まれてくる我が子の顔も知らぬまま、中村萬平は凍てついた満州の武川というところで亡くなるわけです。

さて、その霜子さんを描いた当時、身ごもっていました、その赤ちゃんのいるおなかを両手で抱きかかえるようにして片膝を立てて、深い緑色の闇の中からじっとこちらを見つめている、その霜子像という絵ですが、時々、そのときおなかに入っていた中村暁介さん、地元の河合楽器の重役まで上り詰めた方ですが、私と同じ昭和16年（1941年）生まれです。おなかの出たはげちゃびんのいいおっさんになってますけど、そのおっさんの中村暁介さんがこうおっしゃるんです。必ずその絵の前に立つと「この絵は母親を描いた絵ではないんですよ。このおなかの中には僕がいたんです。ですからこれは母子像、母と子の像。これは父の残した母子像なんです」。そうおっしゃるんですね。

暁介さん大変お元気です。戦地から送られてきたデッサン帳の1枚に、この中村萬平が戦地からまだ見たこともない暁介さんを描いた、赤ちゃんのデッサンがあります。カールされたようなまつげで、くりくりとした富士額の、すやすやと眠っている赤ちゃんの寝顔です。なんとそれが昭和16年生まれ76歳の暁介さんにそっくりなんです。見たこともない我が子を描いたんですよ。おそらくこれは想像



ですけれども、戦地にたつて毎晩毎晩この中村萬平は、顔を見たこともない我が子の顔を、頭の中で何度も何度も何度もデッサンを繰り返していたんじゃないかな、そんなふうに思います。とってもすてきな絵です。忘れないでください。中村萬平という画学生さんの絵です。

小さい美術館です。お話しさせていただいている、この会議室の半分あるかないかでしょうか。数年前に第二展示館というのができまして、そこもほぼ同じぐらいの規模の美術館です。第1には、今申し上げた中村萬平、日高安典の絵が並ぶ真真正面に、蜂谷清というレイテ島で22歳で亡くなった、画学生さんの絵が飾られています。清のおばあちゃんの絵です。この蜂谷清という人は、実は私のこの無言館に並んでいる画学生さんの大半は、美術学校を出た方々なんですけど、かれは独学の人でした。例えば、現在の東京上野の藝大は、戦前は東京美術学校と呼ばれていました。また、現在は武蔵美、多摩美と呼ばれていますが、当時は帝国美術学校でした。主にそういった美術学校を出られた学生さんの絵が並んでいるのが無言館なんですけど、蜂谷清は独学で

した。

映画の看板を描いていたお父さん、それを手伝いながら絵を描く喜びを得ます。千葉の小学校、中学校を出たあと、松原デザインという銀座のデザイン会社に就職します。そのとき召集令状が届くんです。召集令状が届いて戦地に向かうまで、11日間しか日にちがございませんでした。蜂谷清は幼い頃、自分をおぶって子守歌を歌ってくれた、なつさんというおばあちゃんに、モデルになってくれんか頼み込みます。自分をおぶって優しく子守歌を歌ってくれていた幼い頃の思い出。なつさんはその当時、清をおぶっていたときと同じ赤いはんてんを着ます。座布団の上にちょこんと座って清のモデルになるんですね。

11日間、出征するぎりぎりまでおばあちゃんを描き続けました。しわの一本一本、そして白いものが混じったまつげ、眉毛、それからほつれた髪の毛、額のしわ、もう一本一本何か刻み付けるように蜂谷清は描くんですね。すてきな絵です。バックがブルーなんです。ブルーの中でもウルトラマリンに近い本当に深いブルーです。そのブルーの前になつさんの

着たちゃんちゃんこが赤く映えるんです。そして座布団の上にちょこんと乗ったおばあちゃんの目が、絵を描く清をじーっと見つめてるんです。いい絵ですよ。すごくいい絵です。

これはご遺族から私がお預かりするとき、遠縁の方からお聞きしたお話でしたけれども、静かにモデルを務めながらなつさんは清にこう言ったそうです。「天皇陛下はんに叱られてもいいから、必ず生きて帰っておいで。そしてばあやんの顔を描いておくれ」。そんなふうになつさんは清に語り掛けたそうです。戦地に着くや否やほとんど間を置かず3カ月後、レイテ島で玉砕死を遂げました。この絵も私の無言館では、いわば一番二番人気の人だかりのする、とてもすてきな絵です。

先ほど言いましたように、絵を描くということだけで非国民と呼ばれた時代でした。しかし不思議なことに、必ずその家族の中で最低1人、その非国民の家族の一員を守った人たちがいた。例えば「末の弟だけは美術学校に上げてやってくれ。その代わり自分が農業を継ぐから」、お父さんお母さんに土下座をして頭を下げたお兄さん。あるいは親の反対を押し切って絵の道に進んだ弟に、弟が戦地にたつてからも家計をやりくりして絵の具を送り続けたお姉さん。必ずかれらを守った人たちがいた。蜂谷清もそうでしたし、日高安典も中村萬平もそうでした。

そういう家族の温かさを一番如実に表す絵に、『家族』というそのものずばりのタイトルが付いた、ニューギニアで昭和18年、26歳で亡くなった伊澤洋の絵があります。この絵は一家がそろってお茶をしている大変幸せそうな絵です。テーブルの上にはむきかけの果物と紅茶と、それからお父さんお母さんは一いちようら張羅の和服と、一いちようら張羅の背広、お兄さんも隆としたネクタイを締めて、妹さんもとてもすてきな着物を着て座っている。ぱっと一瞬見ると、豊かだな、この家は。昭和初期のいかにも東京郊外の、幸せな一家だんらんを描いた絵のように受け取れます。この絵は栃木県南河内郡というところの、ニューギニアで26で死んだ伊澤洋さんのお兄さんの民介

さんという方が、その絵を戦後50年大事にされてきました。

実は南河内郡の栃木県の、高速道路を下りて畑道を、あぜ道をくねくねと曲がったところに、まるで鶏小屋か犬小屋のようなひしゃげた、ぼろっついしょぼい家があったんです。まさか人間が住んでる家じゃないと思って一度通り過ぎまして、番地は確かここだなと思って訪ねたところが、伊澤民介さんのお宅でした。そして後生大事にしていたその『家族』という絵を私に手渡してくれたんです。思わず私はこう言いました。「伊澤家というのは昔良かったんですね」。失礼でしたけど、そんな言い方が思わず口から出ました。そうしましたら3本も4本も歯の抜けた大きな口を、ケタケタケタッと開けて民介さんが笑います。

「館長さん、そうじゃないんですよ。これはね、洋がうそをついた絵なんです。私の家は朝から晩まで野良仕事、こんな一家だんらん、おいしい紅茶を飲んだりする時間はありませんでした。おそらく洋は戦地にたつに当たって、自分が戦地に向かったあと、家族にはこういう暮らしをしてほしい、幸せになってほしいという願いをこの絵に込めていったんだと思います。この絵は洋の空想画なんです」。そういうふうにおっしゃったんですね。言われてみれば、絵にはそういう役目もありますね。事実、美しい花や美しい夕焼けや美しい人の顔を描く役目と同時に、こうあってほしい、こんなふうでその人が幸せに暮らしてほしいという願いを刻む。これもまた絵の持つ大きな大きな仕事だということに気付かされます。

なんでもこの民介さんいわく、伊澤洋さんが東京美術学校を受験したときには、家が戦々恐々だったそうです。合格してほしいのはやまやまなれど、もし合格したら入学費はどうしよう。お金がなかったそうなのです。庭にあったケヤキの木、伊澤家が家宝としていたケヤキの木をお金に換えて、伊澤洋の学費に充てたといわれています。

洋が満州に旅立ち、フィリピンに転戦し、その後

ニューギニアに渡ります。「洋死す」という戦死公報が届いたとき、親御さんたちは声にならない声を上げて泣いたといわれています。白木の箱の中には一握りニューギニアの砂だといわれる砂が、戦友の手によって小さなハترون紙の封筒に入れて、白木の箱にはそれだけしかなかったそうです。洋は一家のスターだったんですね。一家のスターが家族にはこうあってほしいという、そのすてきな幸せそうな一家だんらんの絵を描いていった。もし無言館をお訪ねになるときが来たら、この絵は美術館の真ん中辺りの左手にございます。

なぜこんな美術館を作ったか。そのことをちょっとご説明しなきゃいけないと思いますが、与えられた時間が限られていますので、きっと尻切れトンボになりますね。私は東京の高等学校を出まして、東京の渋谷にあります、小さな東亜という生地屋に店員として務めておりました。東京オリンピックの前年に小さな水商売をはじめ、折からの高度経済成長の波に乗りました。父と母は靴の修理屋でした。明治大学和泉校舎の前で靴の修理をやっていた両親でした。ただ、大変貧しかったですけれども両親は優しく、東京で空襲で焼け出されたあとも、地を這うような生活の中から私を高等学校まで上げてくれた、優しい養父母でした。

さて、その男、窪島誠一郎、絵が好きだったんですね。美術学校へ行って画家になるようなことは、老いた両親の顔を見れば、自分は不可能だということも分かってましたけれど、絵描きにはなれなくても、好きな絵を集めることはできるんじゃないか。これが私の、渡世人、窪島のしたたかなとこでございます。好きな絵描きの絵を集めはじめました。一番最初に虜になったのが村山槐多かいたという、これが私が今信州上田で暮らしている、いわばキューピッドの役を果たしてくれた絵描きです。1919年(大正8年)、22歳5カ月で亡くなった天才画家です。この村山槐多の絵を追っ掛けて、小さな水商売を開いて何年かした頃でしたでしょうか、経済的に多少ゆとりができた頃、信州上田という自分の生まれ里でも

ない、赤の他人のふるさとである上田を訪ねたのです。

昭和54年の6月に、その村山槐多の絵が並ぶ「信濃デッサン館」という、これもまた小さな掘っ立て小屋のような美術館でしたけれども、上田の郊外に美術館を作りました。今お話ししている戦争で死んだ画学生さんの美術館は、その信濃デッサン館が開館18年目になった今から20年前、分館として隣接地に作ったのが、この無言館という美術館なんです。きっかけはとっても簡単なきっかけでした。先ほどお話ししました、大正時代の天才といわれた村山槐多。「槐多」という字は皆さんビジネスでは縁のない話なので、ちゃんと覚えなくてもいいですけど、木偏に鬼と書く「槐」という字があります。多数決の「多」、多いと書くんです。槐多、村山槐多。横浜の旭区の生まれです。そして後に信州で活躍して死んでいった絵描きさんなんです。この絵描きさんがいなければ、私はこの上田という土地も知らず、また、後に無言館という美術館もつくる縁も持たなかったんじゃないかなと思います。

ある日この村山槐多をしのぶ集いを開きまして、そこに訪ねてきた、戦地から復員してこられた絵描きさんがいらっしやいました。野見山暁治さんという画家です。これは大変有名な方なので、聞いたことぐらいいおありかなと思いますが、野原の「野」、「見」るに「山」ですね。ぎょうは「暁」と書きます。字は明治時代の「治」、治めると書くんです。野見山暁治。現在97歳、お元気ですよ。ものすごくお元気です。おとし文化勲章を受章されました。

ちょっとプロフィールついでに、野見山先生のことを自慢するんですけど。96歳のときでしたかね、日本経済新聞を見ていましたら、先生は東京の氷川台というところにお住まいなんです、有楽町線に駆け込み乗車でドアに挟まったという。「野見山画伯ドアに挟まる」という記事が出ておまして。そのときのコメントがすてきでしたね。「前に行く若いやつがもたもたしてた」って。この野見山暁治先生、当時、ちょうど今私が76歳になろうとしてま

すから、私より2個下、74歳だったかな、野見山先生が私の早死にした村山槐多のある、信濃デッサン館という美術館を訪ねてきてくださいました。

それまで私はこの先生には、戦争からお帰りになった方ぐらいの知識しかなかったんですけど、私の美術館と峠を1つ越えたところに別所温泉という温泉がございまして。文人墨客に人気のある、大変ひなびたすてきな温泉なんですけど、一晩そこで野見山先生と語り明かし、飲み明かし。当時、先生はあまりお飲みにならなかったんですね。ノンアルコールもあの頃は出てませんでしたしね。背の低い小っちゃいビールを飲みながら私の話し相手になって、耳たぶを赤くしながら私の話にうなずいてくださいました。お風呂に入ってたときでした。先生とお風呂に入ってたときに先生がぼつんと「窪島君は早死にした絵描きが好きだったね」「別に早死にした絵描きが好きなんじゃないって、村山槐多っていう絵描きに引かれたんです」「そうか。僕は戦争から帰ってきたんだけどね」。ちなみに野見山先生は、昭和13年に東京美術学校に入学。現在の東京藝大です。そして昭和18年、繰り上げ卒業をなさいます。

繰り上げ卒業、奇妙な名称ですけど、あの頃は特に文科系の学生さんは早めに戦地に送り出されたとさえいられています。正規の学校に通う時間を短縮させられて、好むと好まざるとにかかわらず戦地に送られた。中には無言館の出口のところに飾られている、佐藤孝という画学生、21歳でフィリピンで亡くなってる画家ですが、この画学生さんは東京美術学校に入学したけど、入学証書と卒業証書をほぼ同時に受け取って、ほとんど学校に通った思い出もなく戦地で亡くなっています。無残ですね。そんなウソのようなことがあの頃は現実としてあったわけです。

野見山先生も繰り上げ卒業しました。東京美術学校在籍は肺を患って留年されてますから、2年ちょっとぐらいだったんじゃないでしょうか。昭和18年に繰り上げ卒業。満州の牡丹江というところに出征します。出征するんですけども、戦地に着くや否や肋膜炎を患います。体を悪くするんです。昭和19年2月、野見山さんは故郷の福岡で療養するために戦地から帰ってきます。復員してくる。

しかし野見山先生は生きて帰りますけれども、将来立派な絵描きになろうと誓い合った、切磋琢磨し

た仲間たちがみんな死にました。「絵の具の溶き方、デッサンのうまさ、自分の何倍もの才能のあるやつがいてね、そいつらがみんな死んじゃったんだよ」。お風呂に入りながら野見山さんがそうおっしゃったんですね。そのとき野見山さんはこんなことを言っていました。「真面目なやつほどどんどん死んでいった。僕はね、デッサンの勉強も疎か、いろんなことに不真面目だった。戦地に行ってさえ不真面目だった。真面目なやつほど先に死んだんだよ。窪ちゃん、ほっとくと彼らの絵はこの世から消えちゃうんだよ」。おっしゃったんですよ。

当時私は52歳でした。あの頃はまだすてきでしたね、僕は。何たって52歳の若さで、野見山先生が74歳ぐらいでした。「先生、僕、先生の同級生、先輩後輩のところ歩きます。先生、ナビゲーターしてください。卒業生の知っている方々に手紙を書いてください。電話をしてください。僕が訪ねます。彼らの絵集めましょう」。言ったんですよ。上手に言えないのがもどかしいんですけど、あのとき自分は何を考えてあんなことを言ったんだろうと思うんですね。思うんですけども、とにかくそう言ったんです。

今から25年ほど前のことです。野見山先生と二人三脚、北は北海道江別市、南は九州鹿児島県種子島。先ほどの日高安典のふるさとですね。全国87のご遺族を訪ねました。野見山先生は「今さら訪ねても絵はないよ」とおっしゃってました。あの頃はちょうど戦後50年が近づいてくる頃でした。「まず画学生たちのご両親はいない。ご兄弟の中にも鬼籍に入った、亡くなった方が多かろう。彼らの絵を探すっていうのは、それこそ海の中から砂を見つけるような困難なことだ。無理だよ、窪ちゃん」。そういうふうに僕に言っていました。

旅が始まってから気付いたことがありました。当たり前のことですけども、その画学生さんたちのご兄弟、みんな僕を育てた養父母の世代なんですね。子供の頃僕は本当に抵抗男で、先ほど言った優しい父だった、母だったっていうのは、この76のじい

さまになって言ってることであって、あの当時は本当に両親に抵抗しました。貧乏が嫌だったし、とりわけ「戦争がなければ、空襲がなければ、誠ちゃんを大学に上げられたんや」。母親は関西尼崎の人でしたから、あの大阪弁が耳にこびり付いて本当に嫌だったんです。時として本当に親を殺したいほど、あの言葉を聞くのが嫌でした。「あんたたちは貧乏を全部戦争のせいにする。でもあの戦争で一稼ぎした人だっているんだ。あんたたち無器用なんだよ。俺はそういうふうには生きない。俺はもっと器用に生きる」。子どもでしたから、そんなに理路整然と罵った覚えはないけれど、おそらく戦争の苦労話をすると横を向く子を見て、親は悲しかったろうと思うんです。

無言館ができる数年前に窪島茂、はつは亡くなっておりました。ところが、北は北海道江別市、南は九州鹿児島県までその画学生を訪ねていく先々に、養父母がいたんです。僕の養父母が。さっきの「これは洋がうそついた絵ですよ」という家族の絵を持っていた伊澤民介さん、窪島茂とそっくりでした。その鶏小屋のような小さな家から出てきた、腰が曲がってひょこひょこ出てきた民介さん見たら、思わず「おじいちゃん」って声をかけたくなるほどでした。初めて教えられたんですね。自分が不都合なもの、不吉なもの、思い出したくないもの、彼らが生きた戦争という時代に全く関知せず、水商売で日々上がる売上だけに一喜一憂して生きてきた自分が、全国歩きを始めたから、くっきりと浮かび上がってきたんです。これ、うそじゃないんです。もう行くたびに「おじいちゃん、おばあちゃん」の前に坐らされるんです。不思議でしたね。

ですから、よくご苦労なさいましたとか言われるけど、苦労はしてないです。してないどころか、行く先々の画学生さんのご遺族はみんな僕を歓迎してくれました。それはそうでしょ。それまで見返りもされなかった自分の弟、見返ってもくれなかった自分の兄の絵を、美術館に飾るからといって収集しに来てくれたんですから。ですから私さっき言ってま



すけれど、中村萬平さんのご遺族のところ、暁介さんのところを訪ねますと、あそこはウナギですよ、ウナギ。浜松ですからね、ごちそうになりました。それから吉田二三男さんという、これは30歳で亡くなった福岡県北九州、門司生まれの、ここ行くたんびにふぐですよ。ふぐをごちそうになる。

でもそんな中で切なかったのは、自分が置き忘れていた、自分の両親の過ごした時代、あらためて50過ぎて、自分の子どもがもう本当に成人を過ぎた年になって初めて、それに気付かされた。あの時代がいかに、その時代を生きた人間にとって本当に切なくつらい、不条理な、理不尽な時代だったのかっていうことを、画学生さんの遺族を訪ねて思い知ったんですね。ですから僕が画学生の絵を見つけたんじゃないくて、画学生さんの絵が窪島誠一郎という高度経済成長男を見つけた。なんかそんな感じがしました。自分ではどっかに隠れてた気はなかったけど、「画学生たちが自分を見つけた」という感覚、これは無言館が20年たった今も、僕は忘れてません。ですからこうやってお金もらって明るいところで一生懸命しゃべればしゃべるほど、自分の身の置き所がないっていうか、居心地が悪いっていうか、そういうものとの戦いがあるんです。

ちょっと話を自分のことから剥がしたいんですけど。いろんなところへ行って、ウナギとかふぐをごちそうになって、いい思いばかりでもなかったんですね。1つか2つはつらい思いがありました。絵を手放してくれなかった人がいた。女性でしたね。当時の許嫁。いい言葉ですね。婚約者、許嫁、恋人。なかなか絵を手放してくれなかった。北九州市の小倉というところに佐久間静子さんという、色の白いかわいいおばあちゃんがお住まいでした。美術学校時代に大恋愛の末結婚した、佐久間修。長崎の航空廠で勤労働員のさなか29歳で命を落としました。「長崎にたつ前の晩、そんなこと言ったことのない修さんが『静子、モデルになってくれ』、あんまり真剣な目で頼むので、私嫌だったんですけど、初めてモデルになったんですよ」。22歳、新婚当時の

ベッドに横たわった、きらきらした静子さんのヌードデッサン。そしてもう一つは胸から上の和服を着て、ちょっとうつむき加減の、含羞に満ちたとしてもすてきな和服姿の静子さん。この妻のヌードデッサンと和服姿の小さな油絵2点を残して、佐久間修は長崎で亡くなりました。

この静子さん、手強かったですね。絵を手放すというので小倉まで行きますと、「いったんあなたにはあ言っただけど、自分が死んだときお棺の中に入れて、一緒に修さんの絵も焼いてほしい。だからあなたに渡すわけにはいかない」。そう言われちゃしょうがないですから信州まで帰ってきますと、夜更けて電話が鳴りまして、「あなた見送ってよくよく考えたけど、やっぱりあなたに渡したほうがいいような気がする。自分もそう老い先がないから」と。そうですかといったらまた小倉まで行くと、また気が変わったと言われて。はっきりしろよ、ばばあと思いましたがね、「もしあなたの言う無言館がこの世に実現したならば、そこで修さんの絵と再会したい」。それが静子さんの願いだったんですけど、美術館が建設に入る頃から入退院を繰り返され、とうとう夢かなうことなく他界されました。もうちょっと早く美術館ができていればなと思ったことです。

もう一人、静子さんのことをしゃべったら、この女性のことも話したくなりました。山口県の徳山市(現・周南市)というところ、新幹線のホームに立ちますと、真っ正面に「はつもみち」という造り酒屋さんの大きな看板が見えます。この造り酒屋の、有名な地酒の醸造会社の、その長男として生まれた、原田新という画学生がおりました。ニュージョージア島南方で亡くなり、24歳でした。この原田新は家が大きな醸造会社でもあって、空襲に遭いませんでしたから、この原田新さんの絵は今でも「はつもみち」の本社を訪ねますと、土蔵の中にちょっとした小美術館、原田新の美術館とも言っていいほど、立派な額縁に入って飾られています。

さて、この原田新に無二の親友がいました。竹馬の友。徳山市の隣に山口県光市という町がございま

すが、そこから出た画学生、久保克彦。この久保克彦は原田新と大親友だったそうですけれども、運命は逆でした。お父さんお母さんを早く失い、遠縁の方に育てられ、当時彼が描いた絵っていうのは、ほとんど全くというほど見つからなかったんです。私も何度も光市を訪ねましたけれども、そのたび手ぶらで帰ってきました。この久保克彦と、先ほど言った原田新、一年違いで東京美術学校に入学します。二人仲良く、メンデルスゾーンとベートーヴェン、レコードをいつも静かに聞いている青年同士だったそうです。

私が原田新さんの土蔵から絵を預かりまして、手に持ちきれないくらい原田新さんの絵を持って新幹線のホームに立っていましたら、原田新のすぐ下の妹さん、当時60歳代半ばぐらいになったかだったでしょうか、あさぎ色のすてきな着物の前を押さえながら、息を切らせてホームに私を追っ掛けてきて、私に筒に入った絵を渡そうとするんです。「これも持って行ってください」「いやいや、あなたのお兄さんの原田新さんの絵は、こうやって両手に抱えきれないほどお借りしました。もう大丈夫ですよ。結構ですよ」と言いましたら、千枝子さんがちょっとうつむき加減に「これは兄の絵ではありません。久保克彦さんの絵です」と言うんですね。徳山っていうところはこだまが1個通り過ぎると、大人の休日倶楽部で行ってる身としては、次のがなかなか来ない。それでもホームでじっくり千枝子さんのお話を聞きました。

兄原田新が南方に出征して3カ月後、親友だった久保克彦のもとにも召集令状が来ます。赤紙が来ます。その晩のことです。久保克彦さんが原田新のすぐ下の妹さん、当時18歳、千枝子さんにプロポーズするんですね。「自分が生きて帰ったら所帯を持ってくれ。一緒になってくれ」「しかし18の何も世間が分からないねんねの私は、どう答えていいかわからずぐずぐず言って、イエスともノーとも言わないうちに彼は出征していきました。そして『自分の身代わりに持ってほしい』と言って渡されたのが

この絵なのです。すてきなんですよ、これが。くわえタバコでね、高倉健なんてもんじゃないですね。もうニヒルってうかね、すてきです。美術学校時代も調べてみたら大変無口な人で、戦地に行っても戦友とは一言も口を利かなかったという久保克彦ですけど、その絵を千枝子さんは戦後50年、ずっと守り通してきたんです。

時間が限られてますから急ぎますけど、これは再婚じゃない。再婚と言うと千枝子さんに叱られるんですが、戦後千枝子さんは地下鉄のエンジニアさんと結婚してるんです。ですから久保克彦の絵はいわばモト彼の絵ですね。このモト彼の絵は、ある時はテレビの後ろ、ある時は納屋の天井、転々としながら戦後50年守られてきた。このまた旦那さんがすてきなんです。僕が本を書くために取材に行きますでしょ。旦那さんの前でしゃべりにくいじゃないですか、克彦さんのこと。でも見れば分かるんです。克彦さんのことを話したくてうずうずしてる女心はすぐ分かる。そういうときに限って旦那さんは用もないのに庭に出て、サボテンに水をやってるんですね。あの旦那さんがいたから、あのモト彼の絵は守られてきた。

ですから鬼の首でも取ったように無言館で僕は今、館主をしていますけど、まだ銀行に残債はかなり残ってますからね、絵の修復も大変。あれはあと二年はかかりますけれど、確かに無言館ができて20年、あの彼らの絵を守った20年は確かに僕が関わりました。しかしそれまでの50年、駅伝がたすきを渡すように私にバトンタッチしてくれた方は、さっき言ったように遺族の人たちだった。遺族の人たちが戦後50年、無名で名も知らない、本当に誰も聞いたこともないような絵描きの卵の絵を、必死に抱え温め続けて僕に渡してくれたんです。それが合計合わさって戦後70年なんです。千枝子さんも残念ながら92歳で、つい2年前ですかね、亡くなりましたけど、そういういわば第一次証言者というんですかね、そういう方がどんどん亡くなっていく。しかし彼らの絵がある以上、いつまでも彼らの

絵の歌い続ける歌を、私たちは聴かなきゃいけないんだらうなっていうふうに、自分を含めて思っています。

時間が迫りましたので、最後でこんな話をしておきます。私は昭和16年(1941年)生まれと申し上げました。あと11月生まれでパールハーバー、真珠湾攻撃のあの開戦の3週間前にこの世に生を受けました。先ほど早回しでお話したように、高度経済成長の時代の中で蜜をすすって生きた口の一人です。戦時中、疎開をしていました。昭和16年に生まれて、昭和18年ぐらいから東京の空襲がだんだん厳しくなってきた、昭和19年、この間といってももう6年半たちましたか、東日本大震災で大変な目に遭った、宮城県の石巻というところに疎開しました。その疎開先、私の父親の靴職人の仲間だったんですけど、戦争が激しくなって、誠ちゃんを抱いて自分のふるさとに來ないかいと誘っていた。あのとき私、石巻に疎開していなければ、世田谷明大前は一面の焼け野原でしたから、親子ともども戦災死したかもしれません。そういう意味では恩人に当たる土地が宮城県の石巻でした。

ご存じのとおり2011年3月11日あの東日本大震災が、こつこつ働き日本の成長の糧となっていた人たちに牙をむいて襲いました。全てが失われ、私を疎開先に迎えてくれた鶴岡さんという方の家も、全部流されました。幸いご家族は大川小学校と渡波小学校に避難して助かったんですけども。

さて、あの震災が起こって1年後のことです。2012年の3月10日から1カ月間、地元の三陸河北新報社という新聞社が会場を提供してくださいました。三陸河北新報社の石巻支社の1階が津波で倒壊しまして、2階3階に避難して新聞を出しておりました。そのときに半倒壊した1階を無言館に変えて、ここで展覧会をやってみようとして私が申し出ました。新聞社のほうもうなずいてくださって、1カ月と5日間だったかな、2012年3月10日から翌4月の15日まで無言館展。もちろん規模は小さかったです。信州の美術館を閉めたわけじゃなく、倉庫に眠って

いる、なるべく東北出身の画学生を集めて無言館の展覧会を石巻でしました。

最初は津波でひどい目に遭ってどん底にいる方々のところに、絵描きになりたくても戦死してなれなかった若者たちの絵を持って行って、それが何の役に立つんだらうって、僕自身がちょっと疑問でした。しかしやってよかったと思うんです。なんと2,000人に及ぶ人たちが、あのがれきの山の中から、仮設住宅から軽トラに乗かってピストン輸送してくださって、この無言館展を見てくださったんです。時がたつたのでお名前を言っていないかと思いますが、その中に水産加工業を営む、娘さんを津波でさらわれ、ご両親があの段階で行方不明、家を流され、経営していた工場も流され、雇っていた25人の働き手のうちの8人の方々が犠牲者になる。何もかも失った社長さんがおりました。その何もかも失った方が、1カ月余開かれた無言館展になんと4回、5回足を運んでくれたんです。

そして当日、無料の展覧会だったものですから、人手が掛けられない、私自身が受付に座っておりましたら、深々と頭を下げられました。それで彼はこう言ったんですね。「ありがとうございました。津波があったから私は今日この人たちの絵が見れたんですね。津波がなければ、絵なんか見るような男じゃありませんでしたから。でも今日この人たちの絵を見てよかったと思います。生きて行く気になったんです。生きていこうと思います」。そうおっしゃったんです。すごかったですね。なんか今までの、ただただ戦争を憎む、反戦平和、それだけを祈る美術館だと思いついていた無言館という美術館に、新しい灯台の明かりがぼとついたような気持ちでした。

だって戦争で志半ばで死んでいった、日高安典や中村萬平や伊澤洋や蜂谷清の絵を見て、生きていく気になりましたと言ってくれたんですよ。僕はこう思いました。あの震災で亡くなった方々は、何で神も仏もないものか。こんなに一生懸命生きてる自分がどうしてこんな災害に遭わなきゃいけないのか。

不条理な運命を呪ったと思うんです。でも顧みれば画学生もそうでした。彼らは国の命令によって戦争、津波に向かって歩かされた人たちです。高台に逃げることを許されなかった人たちです。その彼らの絵が呼び掛けたんですよ、がっくりきてるその社長さんに。「生きていきましょうよ。僕たちはこれだけ愛する人を描いた。精いっぱい愛する人を描いた。生きていきましょう。あなたにはあした生きる命があるじゃないですか」。きっと僕はその社長さんに、その絵はそう語り掛けたと信じてるんです。

絵というのは1回見ただけじゃ駄目です。2度3度見てみますと、だんだんその絵描きさん、そして描かれた絵が近寄ってきます。語り掛けてきます。その言葉にこちらからも何か語り掛ける。本当にビジネスでお忙しいでしょうけれど、そんなお時間大事にしてください。それから私は今、こう偉そうに

しゃべってますが、ホントにお金がないんです。それで突然ですが、僕の書いた拙い本がそこに並んでいます。それでお一人お一人命懸けでサインをします。買ってください。村山槐多のことも書いてありますし画学生たちのこともたくさん書いてあります。それで忙しいと思って、字の少ない本ばかり持ってきました。絵の多い本です。失礼しました。ありがとうございました。

